

# テキサス・チェーンソー ビギニング

2006(平成18)年10月24日鑑賞〈角川ヘラルド試写室〉



監督=ジョナサン・リーベスマン/出演=ジョルダナ・ブリュスター/テイラー・ハンドリー/マット・ボマー/ディオラ・ペアード/アンドリュウ・ブリニアースキー/R・リー・アーメイ/リー・ターゲセン/シア・バッテン (角川ヘラルド映画配給/2006年アメリカ映画/92分)

## 第2章

発想の面白さで見せる

……ホラー映画嫌いの私だが、「覚悟がなければ、観てはいけない」という警告を無視して、あえてその「名作」を……。『悪魔のいけにえ』からメンメンと続く本格的ホラーは、『テキサス・チェーンソー』でさらに進化し、人皮をかぶった殺人鬼レザーフェイスは有名なキャラらしい……。本作はそのタイトルどおり、その「誕生秘話」を明らかにしながら、2組のアベックの恐怖を描くもの。そしてそのキーワードは、人肉、切断、人皮 etc……。鑑賞後のカレー・シチュー系の夕食にはくれぐれもご用心……。

## ちっとも知らなかったナア……

この映画のタイトル『テキサス・チェーンソー ビギニング』は、バットマンの誕生物語に焦点をあてた『バットマン ビギンズ』(05年) (『シネマルーム8』127頁参照) と同じく、前作『テキサス・チェーンソー』(03年) の主人公たちの誕生物語に焦点をあてたもの。その主人公たちは、前歯のない保安官のホイット(R・リー・アーメイ) や両足のないモンティをはじめとして、人肉を食らうヒューイト家の面々だが、最大のポイントはチェーンソーを振りかざす殺人鬼レザーフェイスことトーマス・ヒューイト(アンドリュウ・ブリニアースキー) にある。

バットマンはなぜ生まれたのか? と同じように、トーマスはどこで、どんな両親の元に生まれ、なぜ殺人鬼となったのか? なぜ気味の悪い人皮の面をかぶ

っているのか？ チェーンソーとの出会いは？ など殺人鬼の「誕生秘話」が少しずつ明かされていく。

したがって、『悪魔のいけにえ』（74年）から『悪魔のいけにえ2』（86年）、『悪魔のいけにえ3／レザーフェイス逆襲』（89年）、『悪魔のいけにえ／レジェンド・オブ・レザーフェイス』（95年）と続き、『テキサス・チェーンソー』で新たな局面を迎えた一連の实在の殺人鬼エド・ゲインをモチーフにしたホラー映画のファンは興味津々だろうが、本来ホラー映画嫌いの私はちっとも知らなかったナーア……。

### 1939年から1969年まで……

私は『悪魔のいけにえ』も『テキサス・チェーンソー』も観ていないが、「恐怖の原点、絶望の頂点」「覚悟がなければ、観てはいけない」が謳い文句のこの『テキサス・チェーンソー ビギニング』の、暗くザラザラしたスクリーン上で展開される冒頭のシーンを見ただけで、その不気味さがよくわかった。プレスシートによれば、その技術的なポイントは、16mmフィルムで撮影されたドキュメンタリー・タッチの粒子の粗い映像とのことだが、その中で語られていくのは、①1939年、1人の赤ん坊が食肉処理工場の血まみれの床で生まれ、②生まれながらの奇形児だったその子は生肉の包装紙に包まれて、ゴミ容器の中に捨てられ、③たまたまゴミを漁っていた女に拾われ、トーマスと名づけられ、④女とその家族が暮らすヒューイト家で育てられた、という一連のストーリー。

このトーマスは、①6歳の時、自傷性的変性顔面異常症と診断され、②9歳から食肉処理工場で働きはじめ、③30歳の時、食肉処理工場が閉鎖された衝撃から工場長をハンマーで殴り殺してしまうことに……。

他方、生まれた土地に異常な執着を持つヒューイト家の家族は、捜索に来た地元の保安官を殺害し、その肉を家族の夕食として食卓に並べ、ホイトは「これからは飢えることなくこの地で暮していける」と宣言した……。

### ベトナム反戦運動の時代だが……

私が大学に入学したのは1967年だが、トーマスが30歳となったのは1969年。そ

の当時は日本でもベトナム反戦運動が盛り上がっていたが、それは逆に言えば、ベトナム戦争が激化していた時代だということ。

トーマスの「誕生秘話」が冒頭で手短かに紹介された後、スクリーン上は一変し、2人の兄弟エリック（マット・ボーマー）とディーン（テイラー・ハンドリー）そしてその恋人ベイリー（ディオラ・ベアード）とクリッシー（ジョルダナ・ブリュースター）が登場し、互いにイチャイチャし放題の様子（？）が描かれる。兄貴のエリックはベトナム戦争の闘士のように、弟のディーンをベトナムの戦地へ連れて行こうとしていたが、どうもディーンはその気はなさそう……？ そんな2つのカップルは、今1台の車でテキサス縦断の旅に出ようとしていたが、それがこの4人の悲劇の始まりとなることに誰も気づくはずがなかった……。

## もう1組のカップルも……

本来はヒューイト家とエリック、ディーン2組のカップルだけで物語を構成してもいいのだが、ジョナサン・リーベスマン監督は話を少し膨らませるべく、エリックらがホイットとトーマスと出会う前のワンクッションとして、バイカーのホールデン（リー・ターゲセン）とその恋人のアレックス（シア・バッテン）が登場させた。

エリックらがホールデンらと出会ったのは、車の旅の途中、レストラン（？）に立ち寄った時。ホールデンらは集団でバイカーをしているようだが、このグループは何となく悪ガキ集団のよう……。それに気づいたベイリーとクリッシーは早々にレストランを出発したが、銃を片手にその車をバイクで追っかけてきたのがアレックス。それに気づいたエリックはダッシュボードに隠していた拳銃を取り出し後ろ向きに反撃しようとしたところ、車は障害物をよけきれず転倒し、クリッシーは車外に放り出されたうえ、残った3人もあわや全員死亡かという大事故に……。

勝ち誇ったように銃を突きつけ、金目のものを出させようとしていたアレックスだったが、そこにパトカーで駆けつけてきたのが保安官の姿をしたホイット。「こりゃマズイ」と思い、アレックスはにこやかにホイットに対応しようとしたが、ホイットはいきなりアレックスを射殺。そして、どうも保安官らしくない言動で暴

力的に3人をパトカーの後部座席に座らせようとしたから、放り出されたクリッシーは飛び出すこともできず、用心深く観察しているしかなかった。「これはヤバイ。何かおかしい」と思いながら、パトカーが去った後、潰れた車の中に入り込み拳銃を探していたクリッシーだったが、そこにホイトの連絡を受けた親戚のモンティがレッカー車に乗って、事故車の引き揚げに……。何とかクリッシーは事故車の中に隠れたままにしていると、レッカー車はヒューイト家の家の前へ。「何とか応援を求めなければ」、そう考えたクリッシーは、とにかく道路に出て助けを求めようとしたが……。

### ヒューイト家の家の中では……

3人を暴力的に家の中に連れ込んだホイトの思惑は、文字どおり「おいしい獲物が来た」、すなわち、3人を「解体して」その人肉を食らうという恐ろしいものだ。私たち観客は想像するのだが、3人にはそんなことはわかるはずがない。まずは、男2人の両手を縛って吊るしたうえ、じわりじわりと痛めつけていくホイトの姿を見ていると、その落ちついたしゃべり方が不気味なだけに余計迫力がある。

他方、バイリーはホイトの母親たちの部屋のテーブルの下で縛られたままだが、こちらも絶望的な状態……。さて、これからどんなおぞましい光景が続出するのか？ ホラー映画の残酷シーンが大好きなあなたはお楽しみだろうが、私は薄目状態にしてこわごとと……。

### 頭が悪いホールデンでは……？

バイクで走ってくるホールデンを見つけて、ホールデンの彼女が「連れ去られた」と告げたクリッシーに対して、ホールデンは「俺の彼女だけを取り戻す」と身勝手な主張をしたが、それでもとにかくホールデンをヒューイトの家に連れて行くしかない。ホールデンは銃を持って自信満々だが、あまり頭が良さそうではなく、何の作戦も立てず事前の調査もせず、ただ家の中へ乗り込んでいだけ……。

ホールデンは最初に発見したモンティの足を銃で撃ち抜き、さらにホイトの頭

の後ろに銃を突きつけたが、「さあ女のところに案内しろ」と命令して案内させるだけ。こんな甘っちょろいことではヤバイのではと思っていると、案の定、駆けつけてきたトーマスのチェーンソーによって半身が切断されてしまってジ・エンド。こんなすごいシーンがスクリーン上では次々と……。

## ベトナム帰りのエリックも頭が悪い……？

ベトナム戦争の中で人を殺すことの快感を覚えたエリックも、ある意味で殺人鬼トーマスと同じような感性を持っているのかもしれない。捕らわれ状態の中でもその闘争心はなお健在。しかも日頃の肉体的鍛練も十分。ところが、どうも頭がそれに伴っていないよう……？

したがって、縛られた状態からやっと脱することができたのに、腰をしたたかに打ちつけられて容易に動けない弟を連れて早く逃げようとするわけだが、もう1人捕らわれているベイリーも助け出さなければならない。しかし相手は複数だし、銃を持っていることもわかっているのだから、脱出が容易でないことはわかりそうなもの。したがって、逃げ出すためにはやはり「攻撃は最大の防御」の考え方で、まずは銃を奪ってホイトやトーマスをやっつけることを考えなくっちゃ……。ところが、そこまで頭が回らないエリックだったから、せっかくのチャンスも水の泡となり、その後何ともひどいことに……。

## トーマスが人の皮をかぶっているわけは……？

最も残忍で恐怖に凍りつくシーンは、「切断台」の上に乗せられたエリックが少しずつ両手、両足を固定させられたうえ、チェーンソーで腕を切り取られたり、首を切り取られていくもの。そして、その次に登場するのが、トーマスがエリックの頭部から顔面のみを切り取り、それを自らの顔にのせるシーン。これこそが、トーマスが人の皮をかぶっているわけだ……。

ちなみに、ホールデンが殺された後、何とか3人を助け出そうと家の中に忍び込んでいたクリッシーは、この切断台の真下に隠れてその一部始終を間接的に見ていたのだから、その恐ろしさは並大抵ではなかったはず……。

## モンティの両足が切断されたわけは……？

前作の『テキサス・チェーンソー』には両足を切断されたモンティが登場していたらしいが、そのわけもこの『テキサス・チェーンソー ビギニング』で明らかにされる。それは、ホールデンをやっつけた後、拳銃で撃たれたモンティの右足の治療をしていたホイトの母親にかわって、ホイトがトーマスにチェーンソーによる右足の切断を指示したため。「何をするんだ！」と叫ぶモンティの声を無視してあっという間にその右足を切断したトーマスは、「続いて左足も」というホイトの指示どおり左足も……。なぜ左足まで切断したのかということ、その答えは「バランスのため」だとか……。

## ホイトの前歯がないわけは……？

兄貴がバカならちょっとハンサム系の弟もバカ……？ 縛られた状態をクリッシーに発見してもらいやっと解放されたディーンだから、彼もまず銃を奪うことを考えればいいのに、とりあえずホイトを襲い、痛い目に遭わされた復讐とばかりに、何度も何度もホイトの顔を地面に叩きつけた。したがって、ホイトの前歯がなくなったのはこのせい……。

それはそれでいいのだが、クリッシーがトーマスに追われて逃げているのを発見したディーンは、ナイフを1本だけ持ってその後を追いかけるという愚を犯したのが彼の命とり……。今は廃墟となっているかつての食肉処理工場の中には、トーマスによって殺された工場長の死体が今なお横たわっていたが、その廃屋の中でトーマスとクリッシーとのかくれんぼ(?)、そしてクリッシーの応援に駆けつけたディーンとトーマスとの闘い(?)が展開されたが、その結果はミエミエ……。

## なぜクリッシーも自分の足で逃げないの……？

トーマスから追っかけられていたクリッシーだったが、腕力では100対1の差があっても、走力ではクリッシーはむしろチェーンソーを持ったトーマスより優位なのでは……？ 現にクリッシーは大きくトーマスを引き離して廃屋の中に入

っていったのだが、クリッシーがそんなところに逃げ場を求めたのが大きなまちがい。とにかくクリッシーは、どこまでも自分の走力を信じて逃げるだけ逃げればよかったわけだ。

さらに、廃屋の中でトーマスから逃げる足としてクリッシーが選んだのは、工場長の車。死体の傍らに落ちていたキーを拾ったのは悪くはないのだが、その車に頼ったのが彼女の運の尽き……。せっかくここまで1人生き延びてきたのに、何と車の後部座席からトーマスのチェーンソーが……。合掌……。

## ホラー映画の俳優は大変……

登場シーンは多くはないもののその圧倒的存在感からして、この映画の主演はレザーフェイスことトーマス。このトーマスを演ずるアンドリュウ・プリニースキーは長年この役柄を演じており、プロデューサーのマイケル・ベイからは、「マスクをかぶるために生まれて来た」と言われているとのこと……。しかし、観客に全く素顔を見せることなく、人皮をかぶった顔だけに役柄が固定されているのは、結構つらいものがあるのでは……？

他方、こんな殺人鬼の手によって恐怖におののきながら残忍な殺され方をする俳優たちも大変。まず、兄エリックを演じたマット・ボマーの恐怖感は相当なものだろうし、ホイットから腰や腕を殴りつけられながら腕立て伏せを10回をやり遂げたにもかかわらず、さらに腰を打ちめされる弟ディーン役のテイラー・ハンドリーも大変。比較的楽だったのは、ずっと縛られた状態から、いきなり喉を搔っ切られるベイリー役のディオラ・ベアードだが、逆に1番大変だったのは、逃げまどい恐怖におののく演技ばかりを要求されるクリッシーを演じたジョルダナ・ブリュースター。彼女は本来は明るい美人顔の女優なのに、こんな汚れ役に徹するのはかわいそうだが、それをやり遂げるのも女優魂……。

2006（平成18）年10月25日記